

組織活性化に関するバタフライのカタストロフィー・モデル

山下 洋 史

本研究は、筆者の従来の研究における「組織活性化に関する（くさびの）カタストロフィーモデル」に、Herzbergの動機づけ衛生理論における動機づけ要因と衛生要因を組み込んだ「組織活性化に関するバタフライのカタストロフィーモデル」の構築を試みるものである。これにより、高橋のI-JchartとHerzbergの動機づけ衛生理論を結びつけ、組織のメンバーの活性化とモチベーションに関して新たな視点を与えることを意図している。

まず前年度において、その基盤を固めるために従来の研究を整理し、その上で新たに「ランク・ヒエラルキーに対する心理的余剰価値」、「ランク・ヒエラルキーによるインセンティブ拡張モデル」、「中次学習と帰納的リラーニング」、「改善イノベーションのカタストロフィモデル」、「組織における二重のパラドックス」、「予期せぬ成功をもたらす柔らかい組織」といったフレームワーク、モデルを提示し、その結果を学内外に報告した。

本年度は、これらの研究成果をふまえた上で、バタフライ要因を設定し、バタフライのカタストロフィー曲面上で組織活性化と動機づけ要因、衛生要因の関係をモデル化した。この「組織活性化に関するバタフライのカタストロフィーモデル」により、組織におけるメンバーの特性について、下記のような示唆を与えることができた。

- 1) Herzbergの動機づけ要因は、バタフライのカタストロフィーのバイアス要因として位置づけられ、この値大きいほど状態変数（組織に対する貢献度）が相対的に大きくなるよ

うに曲面が移動する。

- 2) Herzbergの衛生要因は、バタフライのカタストロフィーのバタフライ要因に相当し、この値が大きい場合は、一体化度指数（平常要因）の値が小さくても（特に無関心度指数が小さいとき）、組織の足を引っ張る行動を回避（中間的な貢献度を維持）する可能性が高い。
- 3) 上記のような中間的な貢献度の状態は、バタフライ要因が大きいと現れる「ポケット」として位置づけられ、本来は「問題解決者型」となるべき活性化されたメンバーを吸収してしまう危険性をはらんでいる。これは、高橋（1993）のいう「ぬるま湯現象」に相当する。

さらに、本研究の拡張モデルがくさびのカタストロフィーモデルを包含し、組織活性化に関してより幅広い視点から捉えたモデルであることを示した。本研究の拡張モデルが、組織活性化およびモチベーションに関する今後の研究に対して、新たなアプローチの方向性を示唆するものとなることを期待している。